

海外巡回健康相談レポート インド小児科相談 続編

シンガポール 日系クリニック院長

元田 玲奈

昨年の同時期、2016年から始まったJOMFによるインド巡回健康相談会の3回分についての総論を、自分のインドへの情熱も込めて熱く語らせていただいた。そこでは、巡回各都市の特徴と相談会の様子を概観し、個人的な感想を加え、最後はご協力いただいている多くの方々への謝辞とともに、「今後もそれに見合うだけの何かを自分が提供していけたら、と願ってやまない。私のインド病は悪化するばかりである。」という言葉で結んだ。これからもこの活動を続けられるということに疑いもせず、やる気満々だったのである。



このレターを読まれている方々の多くはすでにご存知であると思うが、2021年のJOMF解散決定に伴い、今回の巡回第4弾を最後にインド巡回健康相談会は幕を閉じる。巡回自体は2020年2月のバンコクが最後になる。この告知が届いた時に私が自覚した感情は二つあった。「残念」「遺憾」は一瞬だけで、自分の中ではそれらの想いはあっという間に飛び越こされて、「感謝」と「期待」で占められた。まず、相談者たち一人一人との30分を頭に浮かべると、自分の中で心残りという感情がなかったことは、本当に有難いと思った。それは、毎回「もう会えないかもしれないから、今、自分ができるところを出し切る」という想いで相談者に対峙してきたからに他ならない。つまり、「後にも先にも一期一会で臨んできた」という実感への感謝である。もう一つは、「いや、これで終わりにはならない」という根拠のない確信である。もちろん、JOMFの活動の一環としては続けられないが、これまで培ってきた繋がりがここでプツンと途絶えることは想像できなかった。だから、「必要としている人たちがいて、提供したいと思っている自分たちがいるのなら、何らかの形で続けられる」という実行可能性への模索を瞬時に自覚した。そして、今回のインド巡回は、「最後である」という事実が背景にあるのもあってか、これらの「感謝」と「期待」という二つの感情が幾度となく交叉するような経験だったと思う。

最初に小児科の今回の活動実績を示す。

10月8日・9日	ムンバイ	ムンバイ日本人学校特設会場
10月10日・11日	プネ	Royal Orchid Central (ホテル)
10月12日・13日	デリー	ニューデリー日本人学校特設会場
10月14日	チェンナイ	The Raintree, St Mary's Road (ホテル)
10月15日	チェンナイ	The Raintree, St Mary's Road (ホテル)
	および	日本人補習校

相談時間：30分／枠

総担当相談者数：63名

開催地	開催日	人数	年齢分布（人数）				
			～1歳	1～2	2～3	3～6	6歳～
ムンバイ	10月8日 火	14	0	1	3	9	1
	10月9日 水	6	0	0	2	2	2
プネ	10月10日 木	3	0	0	0	3	0
	10月11日 金	7	1	2	0	3	1
デリー	10月12日 土	10	0	0	0	1	9
	10月13日 日	16	0	3	1	7	5
チェンナイ	10月14日 月	2	0	1	0	1	0
	10月15日 火	5	0	0	2	1	2
合計		63	1	7	8	27	20

相談内容（重複あり）：

内容	人数			
	チェンナイ	プネ	ムンバイ	デリー
一般相談（持病や感染症・皮膚トラブルなど）・健診・予防接種	4	9	14	19
発育（低身長・体重）	0	1	1	3
運動発達（歩行・姿勢など）	0	0	1	1
言葉の遅れ・発達障害など	2	2	3	3
食（少食・離乳食など）	0	3	2	1
排泄（夜尿・便秘など）	1	0	3	0
行動特性（かんしゃく・衝動性・こだわりなど）、チック	2	1	6	6
インドでの治療や大気汚染のこと	1	1	0	5

相談内容には、「インドならではの」とそうでない相談があるが、前者の中で特にデリーで多いのは大気汚染についてである。「大気汚染の中において、この子たちが大人になった時に影響はないのか？」と。実はデータがないので、これは回答に窮する質問である。データがない時は経験を引っ張ってくるしかない。「日本の高度成長期にはスモッグでひどかったけれど、今の60代の大人たちは元気にしているから」とか、「北京やジャカルタに数年住んでいて、喘息を発症した子がシンガポールに来て、最初の1年間くらいは落ち着かなかったけれど、きちんと対処したら今はゼイゼイすることもなく元気に過ごしている」とか。軽々しくは言えないにしても、「人間の体はそんなに柔（やわ）ではない。特に子供には修復力があり、呼吸器系も免疫系も発達していくのだから、大気汚染で起こった気道の損傷

がそのままずっと残っていることは少ないのではないかと思う」というのが、私の回答である。

実際に多くの相談内容は「インドに限らない」ものである。それは、「子供を育てること」そのものに内在する様々な葛藤や不安や迷いが本質であり、だからこそ小児科医の自分が役に立てるのが嬉しい。前述したように、私は「後悔なく自分自身を活かした」と思う時、真っ先に「そうさせてもらえたことが有難い」と感じる。これまで何度か巡回活動の報告書でも述べているが、私が30分間フルに相談者だけに集中して対峙できるのは、その陰で実に多くの方々の見えない理解と協力があるからである。そして、相談内容の問題の重症度に関係なく、相談者たちが私の力を引き出してくれているように思われてならない。今回、巡回最初の都市はムンバイであった。今年はクリアな疑問・悩みを抱えている人が多く、夜泣き、落ち着きのなさ、登園しぶり、感情のコントロールの難しさ、爪噛み、遺尿、夜尿、場面緘黙、言葉の遅れ、吃音、対人関係が上手く取れないなど、どれを取っても「小児科の本領発揮」という相談ばかりであった。さらに煮詰まった不安で一杯な親の感情を受け止めながら、足りない資源のなかで何ができるかを一緒に考えるという作業を進めていくと、「そうか、なるほど」とか「やってみようと思う」とか言いながら親の顔つきが変わってくるし、その親を傍で見ていく子供の様子も変わってくるのが目に見える。これは本やネット検索だけではおそらく得られない現場の臨場感がなせる技であると思う。



もう一つ私が感謝したいのは、自分自身の学びである。ムンバイ、プネ、デリー、チェンナイなどの都市にも最低一人は発達に悩みを抱えている子供はいる。日本語の発達もままならないのに、日本人が周りにいない環境で過ごさないといけなかったり、英語ができないし、理解をするのにも時間がかかるため現地の学校からも門前払いされてしまい、なんとか補習校で頑張るしかなかったりと、相談されても一瞬私自身が途方にくれそうな状況である。加えて子供達に現れるのは、不安や苛立ちからくる反抗的態度や落ち着きのなさややる気のなさで、親の焦りや不安と相乗作用して二進も三進も行かなくなっていることも多い。このご時世、このような状態の子供をどうしたら良いのか？という問いをネ

ットで検索したのなら、「専門機関に相談しましょう」と書いてあるだけであろう。だが、日本のような療育機関も情報交換できる団体も全くないし、かと言って父親の仕事の都合で日本にすぐに帰るといふオプションがあるわけでもないの、どの家庭も暗中模索のような状態で日々奮闘している。私は問題の具体的な場面を想像しながら相談に乗り、まず、家庭の中でできることを考え、ベストではないかもしれないけれど使えるものはなんでも使って、という姿勢であれこれ対策を提案してみる。そして、一年後。再会してまず驚くのは子供の成長である。今回もそのような再会がいくつかあった。おそらく、これはこの子たちの持っている元々の発達力に由来し、親がそれを阻害しないように一生懸命考えて対応していると自然と到達していく姿なのかもしれない。例えば、日系の幼稚園がなくても、目の行き届いたアットホームなローカル幼稚園に入れて、インド人の先生に可愛がってもらい、インド人の友人たちと一緒にいることが楽しいと思えたら、そこから子供は言葉を発する意欲が湧いて、自分以外の人間に興味を湧いて、英語と日本語が混在しながらも少しずつ言葉を覚えるようになる。これだけでもぐっとできることが増えるので、本人にとっても親にとっても自信になっているのが分かる。また、全体的に親がたくましくなっていることも印象的である。「ない」ことで、人間本来の持っている発達力を見せてもら

えているのは、実に有難い。それは、私自身が常日頃唱っている「発達障害の対応は子育てそのもの」に通じるものがある。さらに、おそらく日本ではない環境、特に「同じでないといけない」という感覚を鈍くしてくれるインドだからこそ、親自身も伸び伸びできることも功を奏しているのかもしれない。

今回、このような余韻に浸りながら各都市で相談会を終えるたびに、「なんとか来年も来てもらえないか？」という声が受け入れ側の人たちから上がった。これほど光栄なことはないし、自分の中で静かに眠らせていた次に繋がる「期待」の感情が呼び起こされるようであった。確約はできないことであっても、日程や経費の負担をうまく分配すれば、不可能ではない。特に受け入れ先である日本人会担当者の皆様は、「さすが、インドで生活をしている人たち」と思わせる躊躇しない行動力があり、「なんとかなる」という姿勢が随所に現れる。この方々が一緒であれば、「期待」が「現実」になる、と思えてならない。

